

只今闘病中——読書ノート⑬

社会主義（思想）と「平和利用」イデオロギー

——『原子力と冷戦』『ドイツ反原発運動小史』『ブロッホの生涯』を読む

天野恵一

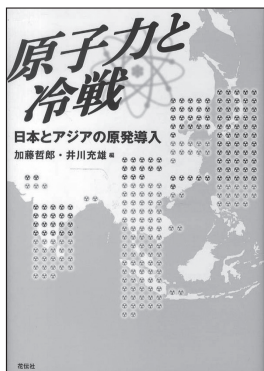
思いもよらなかった作業に、この間、取り組んでいる。まともに読んでくることのなかった小田実の仕事を、歴史的に追いかけてみるという作業である。そのプロセスで手にした、一九六七年に刊行された岩波新書、『義務としての旅』の中に、こういうくだりがあった。

「結局のところ、南ベトナムの未来は解放戦線の一〇項目を実現して行くよりほかはないのだろう。そして、私がそのことをここで強く主張するのは、私自身の未来もまた、この一〇項目と大きくかわりあいをもっているからなのちがいない。／たとえば『植民地政権を倒し、人民のあらゆる階層、あらゆる民族、および宗教社会の代表を含む民族民主政府を樹立する。』たとえば、『幅広く進歩的な民主主義を実現し、すべての民主的自由権を布告する。言論、出版、集会、結社、労組、移動の自由がそれである。信仰の自由を保障し、国家はどのような宗教に対しても差別待遇をしないことを保障する。すべての愛国政治団体と大衆

組織にたいしてはその政治的傾向を問わず、活動の自由を認める。』あるいは、『国家は一定限度以上の土地を持つている所有者から交渉により、公平かつ合理的な価格ですべての土地を買いあげ、土地のないものや貧農に無料かつ何らの条件をつけることなく分配する。』そしてまた、『外国軍事基地はすべて廃止する』、『平和と中立の外交政策を進める』、『全面軍縮と核兵器の禁止、原子力の平和利用を要求する。』／これらはすべて、南ベトナムの未来の問題であるとともに、私自身の未来の問題でもあるにちがいない」（傍点引用者）。

南ベトナム民族解放戦線が「原子力の平和利用」を基本政策の一つにしていたとしても、当時小田が、その事に何ら疑問を持っていなかったとしても、それほど驚くべきことではないのだろう。

それは、社会主義国家圏にとっても、自明の推進されるべき政策であったのだから。しかし、私は、今日の眼で、



このくだりを読みながら、〈3・11原発震災〉をはさんで、準備され、今、安倍政権によって加速されつつある、日本のベトナムへの原発輸出という、許されてはならない政策に、思いを馳せざるを得ない。私は〈3・11〉以後、実は、水爆づくりも原発生産も「平和利用」キャンペーンも、アメリカよりもソ連の方が早かったという歴史的事実が示す問題に、注目すべきだと考え続けてきた。誰か、この問題を正面から批判的な歴史分析を提示してくれないものかと期待していたのである。

冷戦と原発

加藤哲郎と井川充雄編の『原子力と冷戦——日本とアジアの原発導入』（花伝社・二〇一三年）には、この期待していた課題の入口を切り開く作業が示されている。

この本は、日本の「原子力」をめぐる冷戦構造下の政治力学を歴史的に分析した五つの論文が収められた第I部（日本の原発導入と冷戦の歴史的文脈）と、ソ連と東欧・南北朝鮮・フィリピン・インドという

具合に、アジア各国の冷戦下の原発導入プロセスをたどった四本の論文の第II部（原発導入とアジアの冷戦）によって構成されている（書き手は一本ずつ別人）。〈3・11〉ショックが生み出したパラダイム・チェンジに支えられた、すこぶるユニークな共同論文集である。

II部のトップ（第六章）の「ソ連版『平和のための原子』の展開と『東側』諸国、そして中国」で、市川浩は、こう論じている。

「最初のソビエト製原子爆弾実験（一九四九年八月二九日）のおよそ二ヶ月後となる一九四九年十一月一日、ソ連邦国連代表リアンドレイ・ヴィシンスキーは第四回国連総会で『われわれがソ連邦で原子力を利用するのは、原子爆弾の蓄えを増やすためではない。（中略）われわれは、われわれの経済運営計画に沿って、われわれの経済・経済運営上の利害において原子力を利用してゐるのである。われわれは、山を砕き、河川の流れを変え、荒野を灌漑し、人間がめつたに足を踏み入れたことのない場所ですらにさらに新しい生活の路線を切り開くために原子力を役立てるのである』と演説した。ソ連邦は、さかのぼる一九四六年六月一九日、国連原子力委員会の中で、『原爆の製造・使用禁止』を提案し、『原子力兵器の使用、製造、貯蔵の禁止にたいする違反は、人

類にたいする最も重大な国際犯罪である」と言い切っていた。ヴィンスキの国連演説は、その同じ国がみずから『最も重大な国際犯罪』を犯したことにたいする自己合理化のひとつであり、対米プロパガンダであった。この恐ろしい、『原子力の平和利用』ならぬ『原爆の平和利用』こそ、国際政治の舞台における『原子力の平和利用』に関する初めての言及となつた。

「民生用」原子炉建設の展望がすでに明らかになつていたであらう一九五二年一〇月五日、全連邦共産党（ボリシェビキ）第一九回大会の初日、党中央委員会の報告にたつたゲオルギー・マレンコフ政治局員は、米アイゼンハワー大統領による国連総会場でのいわゆる『アトムズ・フォーピース演説』に一年二ヶ月以上も先行して、原子力の平和利用を称揚した。（傍点引用者）

ナンと、「原発の平和利用」キャンペーン以前に「原爆の平和利用」という剥き出しのグロテスクなキャンペーンがあり、その必然的延長線上に「原発（原子力）の平和利用」キャンペーンが展開されたのである。それが本当に恐ろしいのは、なんとというグロテスクな、というのは今日の実感であつて、当時、このキャンペーンは、当然のこととして世界の社会主義運動の中に受けとめられていたことである（徳田球一をリーダーとする日本共産党の「原爆の

平和利用」の主張については、この本の編者の一人加藤哲郎らによつて、この間、あらためて明らかにされてきた）。

資本主義国（最大「帝国主義」国）アメリカも社会主義国ソ連も、原爆のパワーをテコとした力の政治という点では、どこも違いはなかつたのだ。

日本をはじめとする資本主義諸国への原子力技術（核）の普及は、ソ連の東欧諸国への普及政策（「平和利用」キャンペーン）に対抗したアメリカの政策として加速されたのである。市川は、この点については、以下のように整理している。

「ドゥブナの合同原子核研究所の設立を直接の目的とするソ連邦と各国の原子力研究・平和利用に関する協力協定は一九五五年の四―五月にあい続いて締結された。この締結を契機に東欧諸国で原子力研究センターの設立が課題となり、その後の一〇年から一五年間に、これらの国々に、ソ連邦からの援助で計一二基の研究・訓練用原子炉、一六基の粒子加速器、五ヶ所の放射線化学・同位体元素研究施設などが誕生した。その間、ブルガリアには原子核・核エネルギー研究所、東ドイツには中央原子核研究所、そしてチェコスロバキアには原子核研究所

が設立された。一九九一年二月のソ連邦解体を東欧における冷戦の終結ととらえれば、これらの諸国のうち、豊富な石炭資源に恵まれたポーランドだけは冷戦時代に原子力発電所を建設しなかった。が、残り諸国はいずれも旧ソ連邦からの技術援助のもとで原子力発電所の導入に踏み切っている。このうち早期に導入を決定したのは、燃料資源に乏しいブルガリアとハンガリーであった。

米ソ両大国（帝国）の対立によってつくりだされた「冷戦構造」という世界のシステムが、巨大な未来への負の遺産である「原発」を世界にふりまき続けたのである。「核時代」の新中国中国の原子力については、ここでは、こう書かれている。

「一九五五年一月一五日開催の中国共産党中央委員会書記処拡大会議をもって中国の核開発はスタートする。会議に毛沢東をはじめとする当時の中枢的政治指導者とともに、中国『原子力の父』 銭三強（一九一三—一九九二）、地質学者 李四光（一八八九—一九七二）らが参加し、種々説明にあたった。このわずか二日後、ソ連邦政府は外国の『平和利用』にたいして、科学・技術・工業の面での援助を提供する用意がある旨、声明を發した。／ただちに、中国はソ連邦との間に六件の協定を

締結、ソ連邦からの大規模な援助のもとに核兵器開発を推し進めることになった。

ここでは露骨に「平和利用」（原発）とは「軍事的利用」（原爆）であったのだ。

編者の加藤哲郎は「あとがき」で、以下のごとく論じている。

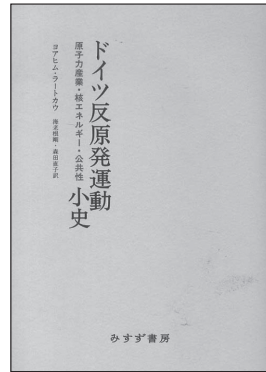
「世界が〈3・11〉以降『フクシマの行方』に注目するのは、福島周辺の放射能汚染や日本のエネルギー政策についてばかりでない。二一世紀に『核なき世界』を実現する上で、日本が『軍事利用』と『平和利用』の境界線上にあり、原爆と原発の双方を含む欧米からアジアへの核拡散の結節点になっているからである。／本書が明らかにしえたのは、その出発点におけるいくつかの問題にすぎないが、ドイツやフランスとの比較ばかりでなく、アジアに目を広げることによって原子力の問題の入り口に立ち得たと自負している」。

たしかに、原発（原爆）問題を日本の国内あるいは日米関係の問題に限定して考えるのではなく、アジアそして世界ワイドの問題として考えてはじめて視えてくるものはあ

る。冷戦構造解体後である、今の原発（原爆）問題を考えるには、冷戦期（の「出発点」）が歴史的に踏まえられなければならない。そういう切実な思いを、実感させる著作であった。

ドイツの反原発運動

本書を通読しながら、私が想起したのは、ドイツの歴史家ヨアヒム・ラートカウの『ドイツ反原発小史——原子力産業・核エネルギー公共性』（みすず書房、海老根剛・森田直子訳、二〇一二年）である。



そののトップに収められた「あれから一年、フクシマを考える」の中で、「ヨアヒム・ラートカウ」は「ドイツの経験は、こうした事柄では息の長さが必要

であることを示している。私はいつも、それを指摘することとで日本の原子力の反対者たちを元気づけている。チェルノブイリ事故のしばらくあとにも、西ドイツの反原発運動の界限に不満が広がったことがあった。『何をしようとする無駄であり、ドイツでは何も変わらないのだ』と人びとは感じたのだった。だが、この印象は間違っていた。現実には

物事が動き始めていたのである。日本でも、ひとは忍耐強くなければならないだろう。大量の褐炭層もEUのように電力網も持たない島国では、ただちに原発を脱することは不可能である。今日、依然として原子力を不可避のもののように見せているのは、主としてすぐに利用できる他の選択肢の欠如であるように思える」。

ドイツで脱原発派がすぐ「勝利」できたのは、原子力以外の選択肢のドイツにおける歴史的な蓄積であったと強調する彼は、抗議行動のローカルな国内的相互ネットワークや国際的ネットワークづくりという運動の主体的力量があった点がドイツの経験の核心であるとし、フクシマ以後、日本にもこれがつくれつつある点に注目すべし（日本の批判者は「一人ぼっちではない」と力説している）。

「ドイツのエネルギー政策にも詳しい高名な「環境史家」である彼が、こうしたリアルな日本の反原発運動への助言とともに想起したのは、ドイツの左翼運動の中の「平和利用」のイデオロギーをめぐる問題である。一九六六年、アメリカの原子炉安全諮問委員会の委員は、軽水炉の安全性の判定をめぐって、原子炉が「暴走」しだした時の備えつけの緊急冷却装置の信頼について疑念を表明した。その結果ニューヨーク郊外の原発計画は中止におこまれた。

「これは、核エネルギーの歴史におけるひとつの転機であった。その影響の大きさは、決して過小評価できない。それまで、多くの『進歩的』知識人たちが、民生用の原子力を核爆弾と結び付けることは愚かであると思ひ、抑制されたのであり、抑制された連鎖反応を伴う『平和的な原子力』は、まさに爆弾の対極にあるという理解を、啓蒙された進歩的なものだと信じてきたのであった。しかしながら、その後、原発の『減速材による連鎖反応』の減速作用には絶対的な信頼を置くことができず、したがって原子力と爆弾との結びつきはやはりまったく迷信ではないのだという懸念がたんたんと浸透していった」。

左翼進歩派と「平和利用」（原発推進）イデオロギーをめぐる問題は、日本にも、分断国家であったドイツにも共通して存在しているのだ。

さらに著者は、このように筆を運ぶ。

「みずからの行動を理論的に根拠づけたいと考えた六八年世代の運動家にとっては、原子力に反対する立場に転換することは容易ではなかった。というのも、当時のネオマルクス主義では、まだ次のような思考パターン

が広まっていたからである。すなわち、社会の進歩は生産力の進展によって推し進められるが、生産力の進展は科学化の進展に基づく。したがって、知識人は今後、革命的な前衛なのであり、まさしくこれと同じ理由から、核技術は最も『科学的な』技術として進歩の頂点にある、という思考パターンである。一九六八年の学生運動の偶像であるルディ・ドウチュケは哲学者エルンスト・プロツホを評価していたが、『平和な原子力』がもたらす恩恵に対するプロツホの心酔は、原子力ロビーのプロバガンダすら凌駕していた。プロツホは、素晴らしい力の源泉（原子力）を十分に精神的に促進していないとして、『後期資本の潜在的な機械破壊』を非難していたのだ」。

「疑いもなく、多くの六八年世代の反原子力へのアンガージュマンは、パニック的な不安から生じたのではなく、大抵は骨の折れる学習過程を通じて遂行されたのである」。「その際、ドイツ共産党に近いグループは、東ドイツとの結びつきのせいで身動きが取れずにいた。というのも、東ドイツでは、核技術は批判者にとってもタブーであり続けていたからである」（傍点引用者）。

ここで引かれているプロツホ自身の文章は、彼の名著『希望の原理』であった。私は、これを読んですぐ、持つ

ではいたが、キチンと通読していなかった好村富士彦の『プロッホの生涯——希望のエンサイクロペディア』（平凡社、一九八六年）を、かなり丁寧に読んだ。さすがに好村は、この問題にはそれなりに自覚的であった。そこにはこうあった。

『技術的ユートピア』を扱った章でプロッホは、社会主義社会での原子力の可能性に大きな夢を託しているが、これなどもその後の原子力発電の実用化の過程で起こった諸問題や、とりわけ一九八〇年以後のヨーロッパの反核運動の高揚とともに高まった原子力発電への批判を知ったなら、プロッホ自身その誤りを認めて、喜んで書き改めるところだろう。プロッホに限ったことではないが、どんなにすぐれた洞察にも、歴史的制約によって遮られた部分があり、私たちはつねに批判的に受けとめることで、それを乗り越える努力を怠ってはならないということなのだ。』

私は、一九八〇年代には、被爆地広島へ帰って生活していた好村から、亡くなる年まで、何年も広島の〈8・6〉集会で声をかけられ、彼が編集した原爆文学の資料などを手渡されていた。

このくだりを読んだ時、私は彼が〈3・11〉ショックの後の時間まで生きていたら、彼の高く評価してやまないプロッホの「ユートピア的終末論」（『革命的メシアニズム』）と原発賛美の科学・技術観の内在的連関にこそ批判的なメスを入れる思想的作業に踏み込まざるを得なくなっただろう。そんなふうに思った。

（あまの やすかず／本誌編集委員）